

# 思考のグラデーション

難波江 和 英

女性学は学問か。それが与えられた課題である。しかし、この課題には巧妙な罫がある。しかも2つの意味において。まず、「女性学は学問か」という質問が、最初から否定的な回答を想定した響きを帯びているという意味において。つぎに、「学問とは何か」という質問に答えずして、「女性学は学問か」という質問には答えられないという意味において。つまり、女性学を学問として肯定するにせよ、否定するにせよ、究極の問題は、判断の根拠となる学問の定義にある。それを忘れてはならない。

1960年代に入り、構造主義が興隆して以来、それまでの学問の定義は見直しを迫られた。ある基盤に立脚し、ものを積み重ねるようにして、何らかの体系を形成するという学問のありかたが、懷疑された。つまり、学問を建物のように構築されるものとして把握する見方が、あるいは、その構築への意志そのものが懷疑された。女性学とは、この懷疑の精神の1つの実践である。それゆえ、かかる方法的な懷疑を我がものとして受けとめられるか否かが、女性学に対する立場を決定する。それを考慮することなく、女性学は学問か否かを議論しても、単なる水掛け論に終わるだけである。従来 of 学問の定義を選択するのは、個人の裁量の問題である。憂慮すべきは、その学問の定義に固執し、それを根拠にして、女性学を学問ではないと否定することである。

優勢な「知」が依拠している前提を暴いて、その自己充足した制度ばかりか、その制度の成立に介在し、行使された「力」を明らかにしたのは、ミッシェル・フーコーである。それゆえ、たとえば「2つの講義」(Foucault, Michel. "Two Lectures." Power/Knowledge: Selected Interviews & Other Writings 1972-

1977. Ed. Colin Gordon. Trans. Colin Gordon, Leo Marshall, John Mephram, Kate Soper. New York: Pantheon Books, 1980.) を読めば、なぜ従来 of 学問のありかたが、構造主義を背景にして懐疑されたのかもわかる。その鍵となるのは、「服従させられた知識の反逆」(81 “an *insurrection of subjugated knowledges*”) という概念である。

フーコー自身の説明によれば、「服従させられた知識」には2つの意味がある。1つは、首尾一貫した理論の体系を形成しようとする過程において、葬り去られ、隠蔽された歴史上の知識のことである。もう1つは、知識と呼ばれる資格がないほど些末で偏狭なものと判定され、「知」の位階の下位に貶められた知識のことである。あるまとまりをもつ体系を形成するには不都合な知識、あるいは弱い知識を「服従」させて成立したのが従来 of 学問であるとすれば、虐げられた知識のなかに「女」に関する項目が含まれていたことを指摘して、既存の学問のありかたに「反逆」を試みたのが女性学である。

そのかぎりにおいて、女性学とは反「学問」である。「女性学は学問ではない」と主張する「学者達」の根拠もまた、そこにある。但し、かれらの批判は、本来の思惑を越えて、自分達の学問では支配しきれない異物に対する、かれらなりの保身の姿勢を表現している。残念なのは、その保身の姿勢ゆえに、かえって思考にこわばりを見せている「学者達」の姿である。さらに残念なのは、現在の女性学が、知識に関する「支配」と「服従」の対立構造を抜けられそうにないことである。それどころか、女性学そのものが、支配的な知識を擁して、「知」の位階の上位を占めてしまいそうな勢いである。それでは結局のところ、旧態依然とした学問の枠組を踏襲することにしかならない。

未来の女性学は、反「学問」でありながらも、「学問」に対立することなく、かつ「学問」に吸収されることもなく、固定観念から逃れるための方法として、その柔軟な思考を展開すべきである。そのとき女性学は、知識に序列を与えることもなければ、知識を体系へと秩序づけることもなく、生成された知識をその源にあたる人間の欲動へと返しながら、そこから改めて、人間の思考を細や

かなグラディションとして開示することになるだろう。そのときにこそ、女性学は新しい学問となり、人間はそれと共に、生きている実感を常識の規範に還元することなく、より自由にみずからの生を発露させるための方法を獲得することになる。

## Gradations of Thought

Kazuhide Nabae

This short essay is an attempt to answer the controversial question, “Are women’s studies a science?”

We should make sure at the outset of discussion that the question is doubly tricky. Firstly, it is designed to sound as if calling for a negative answer. Secondly, we cannot discuss whether women’s studies are a science without discussing what a science means. In other words, the point at issue is the way we define the term “science,” for the definition of science offers the final ground for judgment, whether positive or negative, over the issue we are now facing.

With the rise of structuralism in the 1960s, we were led to redefine the term “science.” In the climate of structuralism, a science was criticized for being a unitary system of thought which would arise from ordering established knowledges in the name of truth. Women’s studies emerged as an attempt to set us free of the scientific systematization of knowledges conducted exclusively for and by men. In this sense, women’s studies can be seen as an anti-science which aims to carry out what Michel Foucault calls “an *insurrection of subjugated knowledges*.”

It is up to an individual to hold to the traditional concept of science. The problem is to label women’s studies as a non-science on the ground of the traditional concept of science. Actually, quite a few scholars have made this misjudgment. Their criticism reflects a self-protective response to what they cannot integrate into the realm of their science. It is

a pity to see these scholars become stiff with a self-defensive pose. It is yet more regrettable that women's studies now seem to be carrying on the scientific systematization of knowledges as they are placed at the upper level of scientific hierarchy.

Women's studies in the future should stay anti-scientific, not necessarily to confront the established science but to function as a method by which people can stay off fixed ideas and demonstrate flexible thinking. Women's studies are to be claimed as a new science which neither hierarchizes knowledges nor subsumes knowledges into a unitary system of thought. Given this, women's studies will open up a new vista where we will no longer reduce our sense of living to the ready-made frame of reference and where we will see the flux (not the structure) of our thinking spreading as gradations of thought.